

クラスター(感染者集団)、ロックダウン(都市封鎖)、オーバーシュート(爆発的患者急増)、パンデミック(世界的大流行)というカタカナがコロナ禍であふれ、人々の頭に翻訳を強い、無用に時間を浪費させ、無用な思考停止に陥りさせている。必ずかっこ書きで書かなければ伝わらないのであれば、それは「言葉」が「他者へ思考を伝達させる」という目的を失っているのではないか。

人は「言葉」を得て、無意識が意識化され、思考が深められ、他者への伝達を可能にする。「セクハラ」や「パワハラ」という言葉を得て、腑に落ちた人がどれだけ多くいたことだろう。「言語」は「記号」であり、「記号が他者にどのような影響を与えるか」という記号論をソシュールは唱える。

高島敏男の「漢字と日本人」によると、明治時代に日本人が英語を日本語にし、例えば、民主主義、経済、政府、政治、裁判、建築、交通、公務員、選挙、会社、銀行、道路、鉄道、自動車、自転車、運動、体育、体操、陸上、野球などがそうであるとのことである。

パットナムが約30年前の1993年に著した『Making Democracy Work (邦題: 哲学する民主主義)』にて「互酬性の規範と市民的積極参加のネットワークや水平的で市民的な絆」である「社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)」の重要性を説いている。「社会関係資本」が優位な北イタリアの方が、劣位の南イタリアよりも、総じてはるかに高い水準の経済パフォーマンス、制度パフォーマンスを強く下支えし、北イタリアの歴史は、市民的な環境の下では、国家も市場もより効率的になることを示唆している。(pp.226-227)「政治的安定、政府の有効性、さらには経済上の進歩にとって、社会(関係)資本は物的資本や人的資本よりさらに重要なものかもしれない。」(p229)と説く。日本では既に「社会資本」という言葉が「道路や上下水道などの産業や生活の基盤となる公共施設」を示すものとして存在したために、「ソーシャル・キャピタル」という言葉のままになりがちで「社会関係資本」という日本語にすることが少ないため、社会的に有意である「社会関係資本」の概念が人口に膾炙しないのではないか。

OT(Occupational Therapy: 作業療法士(作業を通じて社会の中で暮らせるように支援する専門職。身体機能の活性化のみならず、認知機能の活性化、思考訓練を図る者。))について、「occupational」を「職業上の」と訳さずに「作業」という日本語にしたことは、その内実を体現する言葉を目指したものとして納得する。

専門家は、外国語を日本語化することを諦めず、直訳ではなく意識をすることを心がけてほしい。それはその言葉の内実を知る専門家だからこその芸当である。

さらに言えば、例えば、通称NITE(ナイト)と呼ばれる「製品評価技術基盤機構」について、仕事上で何年も関わったが、漢字が10字も続くと覚えがたく、その機関の職員も覚えてもらえないと言っていた。「企業型記録関連運営管理機関等」は日本語であり意味は分かるのだが、目で追いかね覚えがたく呪文のようだ。漢字の羅列は8字くらいまでが丁度いいのではないかと思う。

無用な漢字の羅列、無用なカタカナの羅列をやめたい。人に翻訳を強い、時間を奪い、思考停止に陥りさせることをやめたい。それはそもそも言葉が持つ「思考を他者へ伝達させる」という目的を阻害するからだ。そして、文章は言葉を尽くして理解してもらうことが大事だ。必要以上に難しい言葉や外来語を使って読む人を煙に巻くことは、読んだ人に理解してもらうという目的を叶えるためではなく、書いた人の自尊心の誇示以外の何物でもない。

日本語の在り方をこう考える。